



近江八幡観光ボラ

先輩の話を伺いました。

人の営みを垣間見るがごとく

高橋 幹雄

私の最終勤務の拠点となった蒲生野は、歴史と文化の宝庫である。退職後、ふるさと観光塾を受講して、さらに興味が増し、関心も深まった。以後、観光ボランティアガイドとして十余年高齢者と呼ばれる現在に至っている。

観光ボランティアガイドを通じて、人々とはなんと多彩なことかと実感する日々であった。

観光客は目的も実に多彩である。何となく訪れる人から、インターネット等で前もってしっかりと勉強して、現地で何を期待しているから、このように対応してほしいと目的と要望が明確な人もある。このようなお客は共に勉強できるし、本当に、どの程度、満足してもらったのかは、お客のリップサービスも



あるから自己判断しかない。

年齢も中高生から90歳を超えるお茶の師匠まで、そして構成メンバーも、募集ツアーから俳句等の趣味グループや血縁関係の思い出作り等まさに千差万別である。

人生は一度きりの瞬間の積み重ねであるから実に限られた範囲でしか体験できない。少しでも幅を持たせるべく、インターネットで調べたり、本を読むことも有効であるが、不特定多数の観光客に接することにより、人の営みの浅さ、深さや生き方の姿まで、垣間見ることができるよう気がする。まさに、一期一会をかみしめながら、訪れる人が限りなく満ちていくように、出来ればまた来てみたいという思いにかられるような観光ガイドを続けていきたいと思っている。

古い近江八幡のお話を伺いました。

「近江八幡は自慢の故郷」

岩戸 開治

これは私の義兄の「郷土の若人へ励ましのメッセージ」(2011年3月発行)へ寄せた寄稿文の表題である。私は八幡生まれでなく、当然子供の頃の八幡を知らない。義兄は、今は大阪に住んでいるが、八幡で生まれ、中学まで永原町上で育った。そこでその寄稿文から、義兄の昔の近江八幡を拾い書した。永原町通りは毎日見ていたのである。永原町上から八幡堀の方へ目をやると、下り坂になっているので八幡瓦の屋根が並木のように続き、先人たちの街づくりの美意識を感じる」と述べている。

また、朝鮮人街道は小船木から京街道筋へ入り、仲屋町通を南に下がり、上筋を鍵之手町へと続くが、「少年時代、この道をどうして朝鮮人街道と呼ぶのか、分からなかった」という。そして、後々になって「通信使が通った道を朝鮮人街道と命名しているのは、近江の国だけである。通信使のために道路を整備したからであろう。ところが、由緒ある道も彦根東高校新聞部の調査(1990〜91年頃)によると、朝鮮人街道の道標が残っているのは近江八幡だけであった」と、朝鮮人街道やその道標のことを詳しく知るようになったようだ。

八幡言葉について「幼少の頃から「もつたいない」「おきばりやす」は毎日聞く言葉であった。……